

## 第2回英語教育改革FD

# 全学共通英語教育のありかた ― 専門教育との接続

日時： 平成21年3月18日（水）午後3時～5時  
会場： 新潟大学 総合教育研究棟B棟5階 プレゼンテーション・ルーム  
司会： 大竹芳夫（人文社会・教育科学系准教授）

### プログラム

開会挨拶

平野幸彦（人文社会・教育科学系准教授、  
英語教育企画開発室代表）

一般・特定学術目的の英語について

ハドリー浩美（全学教育機構准教授）

理学部・大学院で必要とされる英語力

湯川靖彦（自然科学系教授）

人文学部・大学院で必要とされる英語力

福田一雄（人文社会・教育科学系教授）

全員参加ディスカッション



## 開会挨拶（平野代表）

本日は年度末のお忙しい中お集まりいただき、誠にありがとうございます。初めに、今回のテーマを設定するに至った経緯を簡単にご説明申し上げて、ご挨拶に代えさせていただきたいと存じます。

みなさまご存じのとおり、本学の英語教育カリキュラムは、平成17年度以降大きく変わりましたが、それと同時に、さらなる英語教育の改善を図るべく、「英語教育改革」作業委員会なる全学的委員会が組織され、合計20数回に及ぶ議論が行われました。

この委員会のそもそもの目的は、コンピュータ等を活用した新しい教育手法の開拓や、より効果的な教育実施体制の検討にあったのですが、その議論の過程で、本学の英語教育の目的、つまり本学の英語教育において涵養すべき英語力とはいかなるものであるべきかという問題が浮上してまいりました。

ご承知のように、大学には小・中・高等学校のような学習指導要領は存在いたしません。また、文科省や首相直属の諮問機関による英語教育に関する提言も、具体的な達成目標については各大学の判断に委ねるといったあたりにとどまっております。

そこで「英語教育改革」作業委員会では、慎重に議論を重ねた結果、他大学はいざ知らず、新潟大学の英語教育は“English for Academic Purposes”、つまり「学術目的の英語」をターゲットにすべきだとの結論に達しました。

しかしながら、その「学術目的の英語」というのが、具体的にどのようなものであるかということ、教わる側の学生はもとより、われわれ教員の間でも、いまだ具体的なイメージを描ききれないでいるというのが現状ではないでしょうか。

そこで、本日みなさまの貴重なお時間をいただいて、まず英語教育企画開発室のハドリー浩美先生から「学術目的の英語」とはいかなるものか、英語教育学の専門家の見地からご説明いただき、ついで、理学部の湯川靖彦先生と人文学部の福田一雄先生から、学部専門教育の観点から学生に求められる英語力について話題を提供していただくことにいたしました。そしてその後、フロアのみなさまを交えたディスカッションにより、このテーマについて理解を深めてまいりたいと存じます。

それでは、まずは講師の先生方、どうぞよろしくお願いたします。

## 一般・特定学術目的の英語（ハドリー講師）

\* 資料参照

## 理学部・大学院で必要とされる英語力（湯川講師）

理学部自然環境科学科及び自然科学研究科環境共生科学専攻自然システム科学大講座における教育・研究指導の実例を紹介した。

理学部自然環境科学科の学生は、2年次までは全学共通科目の英語関連授業を聴講しているが、3年次には英語教育を目的とする授業科目が用意されていない。4年次では、個々の教員の下で課題研究に従事する際、英語の専門書（入門的教科書）や学術論文を読む必要がある。大学院の入学試験では英語を課しており、大学院の学生は、学術論文を読むことに加え、国際学会での発表の機会があり、その際には英語のAbstractや発表ポスター・発表原稿の作成が必要となる。本学自然科学研究科では英語の博士論文の執筆、学術論文の発表が課せられており、英語の読み書きが必須である。

3年次の授業では、個々の教員の裁量により英語のテキストを用いる場合がある。発表者の担当授業では、AtkinsのPhysical Chemistry (Oxford University Press)を用い、聴講学生に音読の後に日本語訳を述べさせ、内容について解説を行う形式で授業を進めているが、進度は極端に遅い。

大学院の入学試験では、出題者が、6割以上の点を取ることでよい問題を作成することに腐心している。また、大学院入学後は、英語アレルギーの除去が指導教員の課題であり、少なくとも週に1回は英語のテキストや学術論文の講読を課している場合が多い。

理科系で必要とされる英語は文法的に難しいものではなく、基本的な文法をしっかり身につけ、「英語アレルギー」さえ起こしていなければ十分である。しかし、中学・高等学校での英語教育の変化や入学試験の多様化などにより、必ずしも必要とされる英語力が備わった学生ばかりではない、むしろ、そうでない学生の方が多いのが実情である。

## 人文学部・大学院で必要とされる英語力

### 一 テキストの特徴から考える「共通英語」と

### 「文系学問英語」の接点

（福田講師）

「共通英語」と「文系学問英語」との接点を考える上で、テキストのタイプや水準に応じて、具体的に英文そのものにどのような違いが生じるのか、また、その違いに応じて、学習者にどのような種類の理解力が要求されるかについて考えてみた。

まず5種類のテキスト・フラグメント（各10～20行前後）を任意に取り上げた。解説文であるText Aは大学生用初級英語教科書、文学テキストのText BはF. S. フィッツジェラルド作The Great Gatsbyの1節、さら



にText Cとして文系学問英語の範疇に入るとされるものを3例示した。Text C-1は、ソシュールの『一般言語学講義』の英訳版、Text C-2は難解で知られるH. P. グライスの論文「論理と会話」の一節、最後にText C-3としてスペルベル&ウイルソンの『関連性：伝達と認知』を取り上げた。

今回は、各テキストの難易を単に直感的に語るのではなく、機能言語学的な手法を用いて、(1) テキスト・タイプ、(2) 使用語彙の特徴、(3) 動詞と過程構成パターン、(4) 節頭主題位置を占める諸要素、(5) 特徴的な文法事項、(6) 理解のポイントの6つの視点を軸に分析し、

- ・やさしそうに見えるText Aにも重要な文法事項が含まれていること
- ・解説文Text Aは、学問的なTextC-1やTextC-2と同様、Be動詞による「関係過程」が中心になっていること
- ・文学作品Text Bは過程構成パターンが多様であること
- ・TextC-1は理論の細部ではなくて一般論の箇所なので、十分な「一般的思考力」が要求されること
- ・TextC-2は複文構造、関係詞節、挿入節の数が際立って多く、かつ専門用語も多いことから、高度な構文理解力と言語哲学・語用論の専門分野に関する基礎知識が要求されること
- ・TextC-3は専門用語の割合が顕著に高いテキストであり、関連性理論の予備知識なしには理解が困難であること

を示した。

結びとして、学問英語の理解は「英語力」+「当該専門分野の基礎知識」+「一般教養」によるものだという点をあらためて強調し、本報告の「ディスカッション」欄にあるような、いくつかの提案を行った。

## ディスカッション

(山崎幸雄先生 人文社会・教育科学系)

ハドリー先生に質問です。高校と大学との接続というお話が最後の方にてできましたが、高校英語をEGP一般目的の英語、そして大学の昔でいう教養課程の英語をEGAP一般学術目的の英語と位置付けておられますが、内容はどの程度区別があるべきとお考えですか。

(ハドリー講師)

全学共通英語EGAPでは、内容的には様々なものが考えられます。基本的には、京都大学の田地野彰先生がおっしゃるように、言語学がご専門の先生でしたら言語学関連の入門書などを、文学がご専門なら文学作品を、教育学なら教育関連のものを題材にすることが考えられます。また、英字新聞や一般向け雑誌、TIME

やNewsweek、Scientific Americanなどを使って思考を促すことも可能かと思えます。

全学共通英語EGAPを高校英語EGPの連続体としてとらえていますので、扱う内容について明確な区別をつけるのは難しいところです。高校との違いは、学術的言語技能の養成が可能である内容を扱う点にあると考えております。

(金山亮太先生 人文社会・教育科学系)

湯川先生から、一部の理学部入学生の文法・語彙力不足には途方に暮れているというお話をうかがいましたが、私も理学部・工学部を教えておりますのでよく理解できます。中学・高校ですでに授業時数が減っており、教えられた情報が我々の時代より少ないことは事実です。大学院入試でもかなり英語のハードルを下げられて、英語アレルギーのない学生に入ってきてほしいとお話でしたが、具体的に大学院、特に修士課程の学生に対してどのような英語教育をなさっておりますか。

(湯川講師)

大学院では、基本的に個別指導です。私の学生には基礎的なものを輪読形式で読み直させています。事前に訳してもらってきて、みんなの前で必ず音読をさせて訳させます。福田先生がおっしゃったとおり、日本語で内容が入っていないとできないので、訳本ではないのですが、似た内容の日本語のテキストも渡して、自分で勉強させます。レベルの差があるため、これで1年終わる人もかなり多いです。しかし、ある程度読めるようになると、やはり真面目な人たちには本物を読みたいという欲求が出てくるので、学術論文を渡して読んでもらっています。

最近ではドクターの学生さんがコンスタントには来ないので、昔の話になってしまいますが、ドクターの学生には、自分で関連論文を図書館やインターネットで検索してこさせ、ひと月やふた月に1回、私も加わって、論文紹介をさせていました。実は、これは我々の時代の大学院ではあたりまえだったことです。論文を紹介して、質問をしたりディスカッションをしたりしていました。しかし、最近のマスターの学生ではできません。まずは、基本的なテキストを日本語サイドリーダーと一緒に読み進むという形から、うまくいけば、本物の論文を読むところまでもっていくようにしています。

(金山先生)

私はずっと理工英語読解という専門のテキストに近いものを読む授業を担当しています。工学部・理学部の学生は、中には本当に素養のない学生もいますが、一般に一から教えればかなりのところまでくるのは間違いないと思っています。ただ、学部のカリキュラム



の中で英語をコンスタントに教える体制が必ずしも整っていないようです。理系こそ英語が必要であるので、各学年で最低1回は、専門の先生が英語を読ませるカリキュラムを学部全体で考えることが、英語アレルギー解消につながるのではないかと思います。我々（全学共通英語教育担当者）が、週2回共通／基礎英語、理工英語読解を教えても、仮にそれが週3回・4回になったとしても、ひとクラス40人で中学・高校の英語の復習のようなことをやっても限界があると思います。学生は自分の興味や将来と関係のある英語をいち早く読みたいだろうと思います。理・工学部、自然系で最低週一回は自分の専門に近い英語を読ませるカリキュラムを考えていただきたいと願っています。

（湯川講師）

正直申しまして全くそのとおりだと思います。慣れるためにはたくさん触れる以外ありません。私も機会あるごとに申し上げているのですが、学部の教員が英語の授業を行うことに関して、合意を得るのが難しい状況です。それで今は、個々の教員の判断で、英語のテキストを使ったり使わなかったりしています。我々の学科で言いますと、もうひとつ3年生の生物系の授業でやはり英語テキストを使っているところがあります。ただ、我々の学科では生物が好きな学生は私の授業をとりませんし、私の授業に来ている学生は生物はとらないという状況で、英語に接する機会はやはり多くありません。4年になるとそれぞれの研究室で英文の文献を読む機会はあるのですが、問題は2～3年次に英語が希薄になっている点です。むしろ、我々（学部の教員）がどのように授業を組み立てていったらよいか、という講習が必要なのかもしれません。

（加藤茂夫先生 人文社会・教育科学系）

湯川先生が、授業で音読をするというお話をなさっていましたが、一生懸命努力はしているのだけれども音声化できない学生に遭遇したことはあります。

（湯川講師）

あります。工業高校出身で何年か勤めてから入学した学生さんでしたが、人前で英語を読むことにコンプレックスを抱いていた様子でした。しかし真面目な子なので、時間を与えれば割り当て部分はなんとか読み切っていました。確かに信じられないくらい読めない人もたまにいます。最近、高校で声を出して読んだことのない学生もいるようです。個人的には、音読させることで、文章を間違えて理解していないか確認できると思っています。

（加藤先生）

Dyslexia、すなわち難読症、読み書き障害の症例はアメリカではすでに30～40年研究されており対処法も

あります。英語を母語とする人の中では15～20%くらいいるらしいです。文字を音声化できない障害で、脳の問題であって訓練はできるけれども治療はできないと聞いています。日本語母語話者の間では3～5%ということで、この差はことばのシステムの違いによるということです。英語母語話者では、6人に1人か5人に1人くらいということになります。他の能力、たとえば空間的知覚能力などは非常にすぐれているわけです。本日の配付資料にある湯川先生の学生さんが作成した資料からも、高度な空間的知覚能力がうかがえます。専門分野では優れている学生の中にも該当する人がいるかもしれません。「英語アレルギー」といわれているものが実は脳の問題で、努力はしているがどうもうまくいかないということも、もしかするとあるのかもしれないと感じた次第です。

（平野先生）

本日、福田先生から「話題提供」として列挙していただいた提言〔(1) 大学での学問英語は基本的に精読中心であるべき、(2) TOEIC的な英語力は果たして文系の学問英語に効果的につながるだろうか、(3) リスニング力や速読力は学問英語とは別の実用英語として重要なので、独立したクラスがあった方がよい、(4) 学問英語は「英語力」＋「当該専門分野の基礎知識」＋「一般教養」によるものと思われる、(5) 共通英語に「読解用テキスト」と「TOEIC用テキスト」の2種を併用するよりも、内容のある読解用テキスト一冊を集中して読む方が効果的と思えるので、教室外学習として義務的にNetAcademy (CALL教材) を学習させた方がよい、(6) 共通英語のテキストとして「文学テキスト」を利用することは、英語的感覚の養成、会話表現の習得、ストーリーへの興味、人間理解のためにも、文系理系を問わず有効ではなかろうか。文学英語は構文的、コンテクスト的に多様なので、あらゆる英語を読むための力をつける機会となるはず。全学共通英語教育に向く文学作品を精選してリストを作成できれば助けになるが、その選択を根拠づけるための英語教育学的研究が必要であり、それは大変興味深い研究分野の一つになるだろう。〕は、私が考えていることと重なる部分が多く驚いています。

まず、(5) についてですが、英語教育企画開発室といたしましては、平成17年度から始めた共通英語の授業内容の見直しを考えています。TOEIC演習とリーディング演習の2本立てでは、やはり時間的に中途半端になることは否めません。TOEIC演習の部分をコンピュータ教材に置き換えることも可能なのではないかと考えています。そして、現在週1コマの共通英語をなんとか2コマにしたい。具体的なプランができましたら、先生方のご意見をお聞かせ願いたいと存じます。

つぎに(6) に関してですが、共通英語などの全学英語で文学テキストを教材に使うことについて、実は



現在科研の申請をしているところです。我々文学屋にとっては特に大切な問題です。選択を根拠づけるための英語教育学的研究が必要であることはおっしゃっており、私もいくつか考えて申請したのですが、決定打に欠けるところがあるので、もしヒントがあれば教えていただきたいと思います。

(福田講師)

平野先生とは全く打ち合わせはしていなかったのですが、そんなふうにおっしゃっていただいて、たまたま私の考えているところと一致したのだと思います。まず、(5)についてですが、私はこの十数年間工学部のクラスばかり担当しています。私自身もたまたましているせいか、読解テキスト、TOEICテキスト、新大の文法の副教材と合計3冊あるため結局どっちつかずに終わる感じになってしまいます。できれば授業では内容のある読解テキストを使って、その代わり、学生諸君にはALC NetAcademyをフルに、今よりも徹底してやってもらったら良いのではないかと考えています。

今まで新大全体として特にTOEIC教育に力を入れたことはあまりありません。TOEIC対策は自分でやるものだというのが前提です。TOEICは、2学期に発展/応用英語へ行くか、基礎英語へ行くかの振り分けのひとつの基準として使ってきました。TOEIC的なものは、リスニングや速読の訓練を受ければレベルアップするのではないと思うのですが、一般に教室で全員でやるには向いていません。入学してきた学生には、文法事項も含めて、いかにも大学の授業だなあと思ってもらえるようなテキストを選ぶことが大切だと思います。

(5)について感想になりますが、工学部を担当しておりますと、学生の声がここ3年程だんだん小さくなってきています。出席の返事も声が小さい。だんだん私自身の年齢のせいだと思えてきて、若ければもっと学生を惹きつけることができるのにと、ペシミスティックな気分になることもあります。あんなに小さい口先だけの声で英語の発音ができるものだろうかと思ってしまいます。英語は、それが日本人的発音でもいいわけですが、それでもかなり腹の底から呼吸しないと出ないのではないかと思います。声があんなふうにどんどん小さくなるのはなぜでしょう。

リスニングの訓練は高校の時にやっても、先ほど湯川先生がおっしゃったように、声に出して読んだことがない。受験勉強でもリスニングと読解ができればオーケーなので、発音する必要がない。それで、少々ないがしろにされているのではないかと考えています。

(6)については、文学作品がなぜこれほどにまで英語教育において軽視されるのか非常に不思議であきれかえっているところです。かといって、どの文学作品が共通英語にぴったりしているとか、どの文学作品が文系の英語力を上げるために必要かということは、根拠がないと全く主張できないわけです。ですから、

どのような作品世界で、どんな語彙や文構造が使われていて、どの年代の作品なのかなどを吟味する必要があります。以前、イギリス人の知り合いからシャーロック・ホームズや『不思議の国のアリス』、アガサ・クリスティのミステリー作品などが良いとアドバイスを受けたことがあります。理由は聞き忘れたのですが、やはり根拠づけが必要です。作品世界も教育的価値のあるものでなければなりません。うっとうしくて嫌になるようなものを与えてもしかたがありません。なんとか科研で成功されることを祈っております。

(平野先生)

(5)についてひとこと言い忘れたのですが、実は、私は、去年の共通英語でTOEIC対策をすべてNetAcademyにまかせてしまいました。90分を速読中心に精読を交えた読解にみっちり充てました。もともとTOEICのリスニング練習は、7月のIPテストの場慣れが目的だったと思うので、ならばCALL教材で十分クリアできるだろうと判断したわけです。ただし、必ずやってもらうために学生の学習履歴をきちんとチェックしました。ただ、このCALLを使ったクラスの結果と、授業中にリスニング練習をやったクラスの結果との差についてはまだ調べていませんが。

(神原信幸先生 全学教育機構)

文学作品の価値が貶められていることについては、国語教育でも指摘されておりまして、むしろ評論文などが国語教育で多用されています。文学作品は、ことばとしては単純なのですが、実際には背後のコンテキストが複雑で、その論理の構成が把握できないと理解できません。そうした背景もあるようです。

昨今の学生の、関連している言語能力と論理能力に対して危惧がよせられている理由は、英語教育だけでなく、国語教育に問題があると指摘されています。日本の国語教育で今批判されているのは、教科書でも、そうした指摘を受けて評論文に対する比重が多くなったものの、実際に扱われる評論文のロジックが簡単すぎるということです。評論文というのは、本来はセンテンス自体の構造は単純であっても、その中のロジックが複雑に組み合わさっていて、初めて有効になるものです。

私は新潟大学の英語の授業で、社会科学系の評論の中でもロジックが複雑なものを選んで学生に与えています。そうすると、学生のことばに対する感性が変わってくるので、これはおすすめできると思います。あと、語彙と文法の自己学習を相当な量で課しています。これは、言語能力に必要なパーツだからです。このような訓練を積み重ねると、おそらく文芸作品にも取つきやすくなるのではないのでしょうか。

もうひとつ、高等教育、広くGeneral EducationとかLiberal Arts Education、そして専門教育といわれ



ているもので身につけなければならない普遍的な能力とは、正確に物を読み（あるいは人の話を聞き取る）、解釈できて、論理的かつ批判的に物を考え、それを書いたり、話したり、発表したり、討論したりすることだと思います。しかし、これが、出来ていない。本来なら、大学レベルでも国語の授業があるとよいのですが。でも、初修外国語ではまだ無理でも、英語ならその役割の訓練に資するものができると思います。私は、評論文を読ませると、その後必ず英語で要約を書かせます。初めは使われている文章をまねてもよいことにしています。だだ、丸写しは認めない。できるだけ自分のことばで簡単でも論理的に書かせます。学生には、はじめから正解や模範を示すことはしないで、つき返しています。学生は、また書き直す。これを2・3回続けると学生は少しずつ変わってきます。最終的には自分の考えをエッセーの形にまとめさせます。手間はかかりますが、何度も思考を促すようにすると、普通の試験のように、訳を覚えてくるとか、瞬間的に文法などの問題が解ける、会話ができるといったレベルから、変化してきます。私のコースをとる学生は大変だなと同情しますが、新潟大学の学生はけっこうやってくるようです。

（岡村仁一先生 人文社会・教育科学系）

お二人の講師の先生方お話の中でも、日本の「翻訳文化」の話が出ていましたが、私自身の英語に対する取り組みを振り返りますと、最初は文学作品でも翻訳から入っていき、それから翻訳では得られない、すりガラス越しで見ているものをもっとクリアに読みたいと思ってオリジナル作品にあたったものでした。あるいは、翻訳されていない論文や作品を読む醍醐味のようなものから英語の必要性を感じたり、英語を通して自分の世界が広がっていったりするという経験を積んできたわけです。

ところが、今の学生は、たとえば私たちが子供の頃読んだ『シンドバッドの冒険』や、女の子なら『若草物語』など、誰も読んでいません。そうになると、翻訳文化を享受せずにいきなり英語に入ることになり、それで敷居が高くなっているのではないのでしょうか。そういうところから英語教育を考えてみる必要もあるのではないかと思います。



## English for Academic Purposes

### 学術目的の英語

第2回英語教育改革FD (2009.3.18)  
全学教育機構 英語教育企画開発室  
ハドリー 浩美

### 英語教育の目的 (Jordan 1997, 田地野 2004)

```

    graph TD
      A[英語] --> B[一般目的の英語  
EGP: English for General Purposes]
      A --> C[特定目的の英語  
ESP: English for Specific Purposes]
      C --> D[職業目的の英語  
English for Occupational Purposes]
      C --> E[学術目的の英語  
EAP: English for Academic Purposes]
  
```

### 英語教育の目的 (つづき)

```

    graph TD
      A[学術目的の英語  
EAP] --> B[一般学術目的の英語  
EGAP: English for General Academic Purposes]
      A --> C[特定学術目的の英語  
ESAP: English for Specific Academic Purposes]
  
```

### ESPの歴史的背景

- 1950~70
  - 第2次大戦後独立したインド・アフリカ諸国におけるESPの萌芽
  - 文法/語彙分析
- 1970~80
  - ESP教育の国際化
  - コミュニカティブ・アプローチ
  - 談話分析/ニーズ分析
- 1990~
  - 英米豪の大学で留学生対象EAPコース増加
  - 日本の大学でも1991年「大学設置基準の大綱化」以降ESP導入の動き
  - ディスコース・コミュニティーでの言語使用研究

### EAPコース・デザイン

```

    graph TD
      A[ニーズ分析] --> B[目標設定]
      B --> C[教授法・内容・スキル・教材・言語活動などの決定]
      C --> D[成績評価]
      D --> E[コース評価]
      E --> A
  
```

### 日本の大学におけるEAP教育

- 国際基督教大学
- 獨協大学/姫路獨協大学
- 京都大学 etc.



## 新潟大学の英語教育

2004-2007 英語教育改革作業委員会

### 学士課程の目標：学術目的の英語 (EAP)

- ▷ 全学共通英語の目標： 一般学術目的の英語 (EGAP: すべての専門分野に共通する学術的言語技能の指導)
- ▷ 学部英語の目標： 特定学術目的の英語 (ESAP: 特定の専門分野で必要な学術的言語技能の指導)

たとえば...

### 全学共通英語 (EGAP)

授業で安楽死についての記事を読んで各自(またはグループ)で事例研究を行いレポートを提出

内容的には必ずしも学生の専門分野との関連性はないが基礎的な学術的言語技能を養成する

### 学部英語 (ESAP)

専門分野で必要とされる内容を扱い学術的言語技能を指導する

## 学術的言語技能とは

### アカデミック リーディング

講義や研究に必要な文献を正確かつ効率的・批評的に読む

### アカデミック ライティング

論文の構造や特徴を学んで執筆する

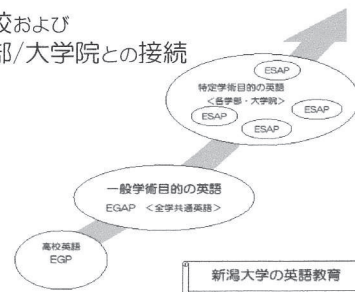
### アカデミック リスニング

講義を聞いてノートをとる

### アカデミック スピーキング

教室で口頭発表や討論をする

## 高校および学部/大学院との接続



## 引用・参考文献

- Dudley-Evans, T. & St. John, M.J. (1998) *Developments in English for Specific Purposes*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 深山麗子 (編) (2000) 『ESPの理論と実践』東京: 三修社.
- 平野幸彦, 高橋歩, 八丁川一浩(2002) 『国際基督教大学における英語教育』、『新潟大学教育研究年報』第7号, pp. 58-65.
- Jordan, R.R. (1997) *English for Academic Purposes*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 桂山康司 (2008) 『京都大学における『英語』』、『京都大学高等教育研究』第14号, pp. 123-131.
- Markee, N. (1997) *Managing Curricular Innovation*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 岡田圭子 (2009) 『GeneralでAcademicな共通英語教育とは』、『英語教育』Vol. 57, No. 11, pp. 22-24.
- Richards, J.C. (2006) *Communicative Language Teaching Today*. Cambridge: Cambridge University Press.
- ストレンジン・ソニア(2006) *A Friendly Approach to English for Academic Purposes*. 東京: 松風社.
- 田地野彰 (2004) 『日本における大学英語教育の目的と目標について』、『IMM NEWS』No. 7, pp.11-21.
- 田地野彰 (2005) 『一般学術目的の英語(EGAP)のコース設計に向けて』、『IMM NEWS』No. 8, pp. 42-48.
- 田地野彰 (2008) 『英語学術論文執筆のための教材開発に向けて』、『京都大学高等教育研究』第14号, pp.111-121.
- 竹園幸生, 水光雅則 (編) (2005) 『これからの大学英語教育』東京: 岩波書店.
- Turner, J. (2004) 'Language as Academic Purpose.' *Journal of English for Academic Purposes*, No. 3, pp.95-109.